

資料

佐伯と国木田独歩(註)

「欺かざるの記」より

会員 山本 保

独歩の日記と左に掲げます。佐伯の自然を説みとるとともに、佐伯滞在中の彼の足跡を調べてみました。

(明治二十六年)十月二十八日

此頃の秋の麗はしきま。蒼穹常に晴れ渡り、大気いつと澄みて静かなり。

山々も近く見え、所々紅葉に飾らる。百舌樹上に叫ぶ時は風除るに來る。

潮満つる時は夜気軽く微ふ。收穫の時なる故に、野には終日農夫の声充つ。嗚呼美しき秋は秋なりぬ。

(註)すばらしい秋の自然描写です。美人詞です。

十一月四日(船頭町・女島)

夜、觀察の爲め、独り散歩す。北野(甘露寺横から鶴城高松附近)の寂しき土炭原を横ざり、古河所(古河町)の暗き裏町を過ぎ、船どう所に至り、そこにて長田(鶴城学館生徒長富福城)氏に遇ひ伴ふて帰り、路におか村で宿す。

此のさびしき市街……うす暗き登障子にうへりたる家、戸しまりて人け空しき家、軒破れてかたむける家、笑ふ声のもる家、かの鍛冶屋、彼の桶屋、彼の乞食、彼の子供等、彼の理髮所、彼の井戸、豈に意味深き物語なしとせんや……

昨日(十一月三日)は天長節にして学校は休みなり、午前收二と共に女島の野らに散歩す。日暖かにして小春の季節なり。されど秋はやはり秋なり。はぜの紅葉すてに散りて半ば枝に止まるものすら、風に鳴る毎にひらめき落るる様、秋はやはり秋なり。海近き河川の口に至り石に腰かけて遊ぶ。

潮落ちて洲はあらわれ、鳥の群しきりに飛ぶめぐる。水門を下りて壘子を見き。小舟をなだ山に渡さんとて潮を待へ子供を見き。水門の傍に背低きはぜ、堤の上に立ちて浜風に紅葉をかかやかす様の美しき。渡守りを見き。此渡守りの小屋に入りて物語らば面白からまし。

女島に山あり。以前は小島ならまし。愛らしき小山なり。樹木繁る。其の蔭に小村あり。家の数は十数個を知らんか。河の口、浜風の衝にありて女島の野良をひかす。吾にとりて愛らしき村なり。魚せり場。こゝにまた「物語」の料がかし。其処に集まる漁夫、老翁、少女……皆それぞれの深き物語りを保つるべし。

昨日ここにたけりののしる男を見ぬ。彼は何者ぞ、こゝにまた何かの物語りならまし。

(註)女島のようにすを端的によく捉えています。

各藩又は番匠川に沿い、すぐ後に難山をひかえていますので、昔から耕地の少ないところとす。そのため部落の人々は対岸女島方面の田畑を賃い入水で、米、麦、野菜などを栽培するたために小舟を利用して、いました。

昭和二十六年番匠川改修工事(二級河川)が国営移管となって以来、女島の堤防も漸次完備されて現在にいたっています。

十一月二十三日(船頭町浜丁、堅田道)



頭差し出し人々の働くを眺め居たり、川原部落渡を渡りて  
て広き野に出づ、農夫野に出づる者多し。麦撒きの忙し  
き時ゆえ、女子皆男と共に働き居たり。

山の麓に唄ゆる一村(津志河内部落)は、その谷に迫りて  
他所と並ばず。特別に世より離れて一村を作る如く見ゆ  
るが故、遠くより望みて何となく懐かしくなりしなり。  
嘗て山の頂より眺めし時、煙立ち昇るを見て己に何とな  
く懐かしかりしなり。

村に近づくとつれて農夫等野に在るを見たり。犬等  
を見慣れず、甚だ吠ゆ。

村は村なり、懐しき村なり。子供らの遊ぶに遇ひぬ。  
馬の嘶くを聞きぬ。しかも甚だ静かなるを感じぬ。壯丁  
農夫等に何事か働き居たるを見ゆ。井戸の傍に少女を見  
たり。水枯れし小川の岸に梅の古木並ぶ居ぬ。柿の実星  
の如く其間に点するを見たり。紅葉燃ゆる如く一叢の竹  
林の間に見えるを見たり。

此村、吾をして同情を以て人類の住所として観せしめ  
り、思ふに種々の悲しき、貴き、深き物語は此の裡にあ  
らん。

(註)の独歩を自撃した人の當時の思ひ出

冬の表まさの峠でした。目なれぬ変わった人が三人、坂より下り  
て来ます。

服装は上は羽織、着物をからげ、白のスボン、黒のキヤハンで、  
荷物をふりわけにしていました。

二人は渋柿がすずなりになつてゐるのに驚いてたようです。

川原部落、津志河内部落の情景が活写されてあります。するど  
い観察力には恐れ入ります。

十二月二十五日(坂野浦妙見神社)

妙見の社に至る。

この社は海に突出せる小丘の上に在りて樹木茂り、波濤

の響、麓に聞え、寂寥たる物色、己に吾と弟とをして、  
これより以前、しばしば来る毎に樂しみて逍遙せしめた  
る地なり。然る此社名の妙見なることを知りたるは、此  
時が初めてなりとす。

吾独り徘徊して去る能はず、堂に上りて、或は壁上の  
戯書を眺め、或は「百人一首」の中、小野小町、在原業  
平等の数名の肖像に伴ふ和歌を額にして掲げたるを仰ぎ  
見、人間の事、時の変遷の事、人情の事、天地の事など  
感想し来りて幽思転々深きを覚えぬ。

(註)の鶴谷学館の冬休み中で、十二月二十五日柳井町へ帰省する  
ため、独歩は葛湯で「上り先松」を待ちました。その待合時  
間を利用して、妙見神社参りをした。その時の様子をす。

妙見神社から日佐伯湾まで望むことが出来ます。すは  
らしい展望場所です。

(明治三十七年) 二月五日 (榊牟礼城址)

昨日午後、榊牟礼に登る。

同行者は薬師寺育造、此人は教会主任者なり。藤田(運  
次郎)山口政策、長溝、岡崎(誠)、武石(素吉)、尾崎(  
明)、以上日鶴谷学校の生徒なり。而して吾等兄弟、凡  
そ九人なりとす。

榊牟礼山は佐伯を去る西、一里に在り、旧跡有り、豊  
後遺事に曰く、

大友到明公(第十九代親征、宗麟の父)の時、榊牟礼城主  
佐伯惟治ノ謀叛ヲ讒スル昔アリ。公曰種長景二命ジ  
テ之ヲ討セシム。榊牟礼城固ヨリ險ニ、士卒亦勇ナ  
リ。長景屢々攻ムレドモ勝ラズ。

此文の如く此山甚だ峻峻奇なり。吾等九人、三隊に分れ  
て登攀す。城址、見るべくもあらず、只だ一たび城址に  
入りたる松、老いて薪となり、今や朽株延々に点在する

のみ、以て此城址の甚だ旧きを知るに足る。  
天曇りて雨時々峰と掠めて来る。四方の光景暗濶たり。  
火を燃して暖をとる。帰路、一巖穴を探る。炬を 掠り  
て入る。

(註)の独歩は佐伯市古市方面より登山したためし。

昭和四十二年一月三日、佐伯史蹟会員大勢は新春初歩きの  
一つとして弥生町井崎方面より登山し、往時をしのびま  
した。

四月二日 (青山黒沢、東光庵)

昨日は日曜日、教会の人々と共に黒沢と称する所に桜  
見物に出行きぬ。

此の黒沢の桜と云うは、吾が佐伯に来りし時以来己に  
しびしび耳にせざる迄なりし也。佐伯町と距る三里半の山  
奥に在り。拜礼(キリスト教会)終りし後、同行者八人、午  
前十時半頃出發す。帰途したるは午後七時半なりし。

桜花は己に散り居たり。

ただ落花紛々の景を賞するを得たりしのみ。吾等はそれ  
のみにて満足したり。桜樹は二本あるのみ。されど幾  
百年を経たりしとも知れざる老樹なり。なかなかに世にめ  
づらしき大木なり。立派なる庵あり、東光庵と稱す。

黒沢に行く路は常に溪流に伴ふて進むなり。此の流れ  
曲折するにへれて路は時々其の岸に沿ひ、或は之を横ぎ  
る。兩側の山脈より分派せる山の尾にたちきられ、村落  
各所に散在す。山裾いたる延の谷にあり。鷲もまた延々  
に啼く、猿犬野に在り。のどかなる景色なり。

茅の産きみごしの山の花咲きて

春日のどかに 奔 駈れり

(註)の毛利高政より家老戸倉行重は、永代知行として黒沢村三百

六十五石を受領しました。

② 宝永二年(一七.五年)毛利高慶(六代)は、産葉奨励のため、

本炭製造所を黒沢に創設しました。これが青山村隆盛の基  
礎となりました。

③ 寛政十一年(一七九九)藩主毛利高標は、那代に命じて春秋

二四黒沢富鹿神社(佐伯信治奉祀)に奉指せています。

④ 明治三十二年(一九一九)薄江道路開通式が下野田村西野で行われ、

まず、道路がよくつたので、独歩が黒沢方面へ訪れたことが  
思われます。

⑤ 佐伯史蹟会、昭和四十二年三月二十六日と、今年三月二十六日の  
二回、東光庵の観桜に訪れました。

⑥ 堅田川流域を水害から守るため、黒沢ダムが建設されました。  
工事費十九億五千万円、本年度から四年の継続事業で  
す。現在、黒沢方面の道路が拡張され整備中です。

五月七日 (本丘村、旧中野村)

昨日は好天気、牧二の外、五名の同遊と共に、再び銚  
子淵を探る。美しき事、先遊(註明治二十六年十月十日)にまさ  
る。是れ新芽の節なればなり。午前七時半出立、夜九  
時帰宅す。五名の者とは富永徳磨、飯沼源二、尾間明、  
山口行一(以上鶴谷学館生徒)、藝師寺育造。先遊の際に  
案内者を雇ひ、此度は吾等兄弟案内者となりぬ。

先遊の時は滝を見る能はざりしも、此の度は溪流をさ  
かのぼりて進みたるが故に、飛瀑の下に出づるを得たり。

(註) 銚子淵は「名勝 銚子八景」として昭和四十三年九月日本五  
村文化財の指定を受けました。

結ぶ

以上は、独歩の散歩、遠行の日記です。彼の足跡は、  
佐伯市、鶴見町、米水津村、弥生町、本丘村に及んでい  
ます。

鶴谷学館教師として勤務しながら、夜間、土曜日、日  
曜日の余暇を利用して散歩を試みています。悪道を徒歩

で強行軍しました。元越山にも登っていますし、尺間登山  
のときは、にぎり飯三十三個を杖の先に突っかけて、  
帚收二ともにてかけ、山頂に泊っています。

独歩が佐伯に滞在したのは約十か月ですが、實質的に  
は八か月にすぎません。その短期間に、これ度と鼎南一  
帯を道邊政渉したということば驚嘆にあらいます。

尺間山、元越山に二度も登り、本五村鉦子淵にも再度  
赴いてみます。

近年、県下各地で「歩こう会」が盛んに催されていま  
すが、独歩はその先駆者であつたといつても過言ではな  
いでしょう。

(住所 佐伯市池船三)

報告

西運寺山門の修復

— 弥生町指定文化財(建造物) —

会員 伊賀重雄

(弥生町文化財調査委員)

西運寺の山門の屋根が近年とみにいたみかひどく、そ  
の老化現象の進行に拍車をかけられているように、見る  
度毎に心ある人々をあげかしていた。そこで四十五年度  
の西運寺護学会では、山門の上壁だけでも修復して風雨  
から護りたいとし、一応の計画を立てて所の教育委員会  
に申達があつた。

これを受けた所文化財調査委員会として日、一応の検  
査をし、専門家に依頼して調査し、その上で討議決定す  
ることをすめた。幸い所出身である佐伯市出納一級建  
築事務所をまつている出納邦弘氏にということになり、

その調査方を依頼した。出納氏は早速専門的な見地から  
細密な調査をし、その復旧についての意見、見積書の提  
出があつた。腐朽及外見以上寸す及、この際上壁を全  
面的に改修する必要ありとし、工費約百拾万円を要す  
るとの算定を示された。

そこで直ちにこれを西運寺護持会の役員会にかけ、  
工事施行を決定、工事は蕨繁期及び多雨の時期をさけて  
四十六年二月頃とし、本予算は實際上屋を解いてから決  
定することにした。

然しいろいろな都合から今年二月十八日から工事に  
かかり、当初の計画に従つて先ず上壁を解体したところ、  
予想した以上上壁根裏極木はじめ各部の損はけしく、再  
見積をした結果、全工費百八拾万円を要すること判明  
した。工事費の不足が大きい。そこで護学会は町当局に  
助成方を願つたところ、不足に相当する五拾万円を補助  
すること、理解ある町議会は決議され、右陰で早速解  
体復旧の工事は進められたのであつた。一件の文化財保  
護の助成に、この様な多額の補助金支出といふことが、  
県下の町村にその例があるうか。弥生町議会は並に執行部  
のこの実践は、ある意味で県下に先鞭をかけたと云つて  
も過ぎではないと思ふ。

修復工事の監督は出納邦弘氏で、始終誠意の甚る施工  
を進め、大工の棟梁は堂宮建築に経験ある三浦嘉吉氏へ  
当所切細出身)、解体から修復までに亘り、誠に当を得た  
コンビであつた。又使用材料もきびしく選ぶ、例之は檜  
材などに使用した檜の材料など、今日の建築にはその入  
争からして困難なのに、高価なものも豊富に集め、それ  
を惜し及なく使用した。

大工工事は三月二十八日に一応完了し、私は再三是を  
運んで見たが、全体的な姿容はすこぶる典雅、特に所歴